

木下尚江の歌

— 歌稿の紹介と翻刻 —

稲垣達郎

木下尚江にとっては、歌は、しょせんは余技だったかもしれない。けれども、そのおりおりの内部的なものを、端的に具象することで、その生をたしかめていたのはあきらかである。趣味や風流以上に、生真面目なものだったように思われる。そこに、尚江の感情なり思想なりの流れを汲みとることができようし、また、時には伝記上の事実を補足できることもあるようだ。柳田泉氏が『日清戦争と尚江の恋―木下尚江伝の一節―』（一九六〇年一〇月「信濃教育」第八八七号・特集木下尚江）で、尚江からの告白的な私信の一部を翻刻紹介された、例の『懺悔』で大まかに語られている若い尚江のロマンティックな恋の相手の諏訪の女性をうたった連作二十四首のごときは、ここにいう意味での、まさしく典型的なものといえよう。死の前年にあたる一九三六年（昭和一一）だったというが、柳田氏もいわれるように、「老いたる尚江の胸に残えずに残っていた、この女性への思慕の情から（*『懺悔』をよみかえしての復習ではなく）新たに流れだしたものの」で、「綿々たる情緒」が美しくあふれている。尚江の晩年の心境とともに告白的な事実があきらかにされている。

六十九年の生涯に、尚江の歌がどれだけの量に及んだのか、見当がつかない。少くとも数百種はあるだろう、というような、さしあたっては、きわめておぼろ気な、言いまわしにもならぬ言いまわしをするほかはない。私版の少数数頒布の小冊子にみえるものを除き、ややまとまったものとして公刊されているのは、例の『鉄窓の歌』七十三首（一九三四年九月刊『神・人間・自由』所収）があるばかりである。しかし、ある時期、とりわけ晩年における作歌欲は、すこぶるさかんだったらしい。今井邦子が、「明日香」第三巻第九号（一九三八・九）へかかげた『おもかげ―木下尚江翁―』のなかに、こんな挿話が記録されている。

翁は私に歌を教へてくれといふ手紙をよこされた。勿論翁はそれまでも歌をなさつてゐたに相違ない。それで私はさうした一面完成した人の歌を批評したり、お世話をやいたりするのは年から云つても為すべきことではないので固くお断りしたところ、どんなに世話をやいてもいゝからと云はれてもはや歌を十首ばかりその手紙に書きこんで送って来られた。

それで私も少し意地といつていいか、悪意のない意地になつて自分の方の歌風からいふとこのお歌の中でも二首しかとることが出来ないといつてあげると、驚いておやめになるかと思ひのほか、点がからいからは本気になると云つてそれからは殆んど一日おきぐらゐに「ドウゾ見テ下サイ」といふ書出して巻紙に達筆で書いてよこされる。

と、こう書いて、「私の頭に残つてゐる」「気持ちよく出た歌」としてつぎの六首を示している。番号は私につけた。

- 1 シグレノ雨夜明ケノ風ノ落葉道傘サシ連レテ娘達行ク（印刷局女工ノ出勤）
- 2 ツクロヘル君ガ針目ノ尊クテ冬ノ肌着ニ手ヲトホシ得ズ
- 3 朝リシ君ヲ今年ハナツカシミ落葉ノ宮へ餉買ヒニユク（七五三ノ祝日）
- 4 生活ノ道ニ急キテ雲ヲ出ヅル朝日ノ影ヲ見ル人モナシ
- 5 朝ナ／＼坂ノ道ニテ逢フ人ノ声カルクマデ親シクナリヌ
- 6 歳ノ暮母ガ夜ナベノ傍ヲニ我レ声立テ、書ヲ読ミタリ

これらの歌は、あとでふれる歌稿ノートによると、不明な3を除くと、いずれも一九三六年（昭和一一）十一月によまれてゐる。したがって、今井邦子が語っている事情は、このころのことであることの見当がつく。つまり、この時期が、作歌欲のもありあがつていたある時期だったわけだ。

ところで、尚江の手許にのこっていた歌稿で、管見に入つたものが五、六点ある。ごく断片的なものを別にすると、つぎのよう

なものだ。

- a 『鉄窓の歌』関係——一八九七、八年。
- b (1) 出獄帰郷前後——一八九八、九年。(2) 木曾旅行——一八九九年。(3) 鉾毒視察——一九〇〇年。
- c 伊香保山居——一九〇六年。
- d 晩年——一九三六、七年。

* なお、一九一二年（明治四五）刊の評論集『創造』に、後鳥羽院・土御門院・順徳院の歌について書いた『歌と人』の一文があることも注意しておく。

このかぎりでは、空白の年代が多い。その部分、とりわけ前半生における状況がどんなものだったかは、あきらかでない。断片的なものなら、あるいは散見するかもしれないけれども、いくらかでもまとまったものがあるかどうか。が、とにかく、歌をもつて自己表出をおこないたい欲求が、みえがくれしながら内在しており、時を得て奔出してくる、といったかっこうである。右に挙げたものを、順次、紹介してゆこう。

a —

『鉄窓の歌』は、尚江の歌の一群としては、たしかに記録的なものだ。前記の単行本『神・人間・自由』のなかへおさめられて、はじめて世に問われた。例の「静産」の生活にはいつて以来、公刊物にみずから筆を執ることはめつたになかった。したがって、一般の定期刊行物からは、木下尚江の名はほとんど消えていた。ところが、一九三三年（昭和八）四月の「中央公論」に、

『政治の破産者・田中正造』をかかけると、ひきつづき、二、三種の雑誌へいくつもの文章を書いた。静座グループ以外に向かつて、久しぶりに沈黙を破ったものだった。そのかん、林広吉氏の

熱心な蔭の力が大きかったようだ。近代日本の社会史・政治史・思想史・文学史などにわたる複雑な歴史のなかをぐりぬけて来た人間の、まさになさるべき生きた証言の意味深さを、尚江自身としても、ようやく承認するにいたったのではないか。半生をかえりみて、そこに去来する諸関係に、時には、なつかしい思いさえ播曳したであろう。ひとつのキツカケがつけば、案外気楽にはぐれてくる。気軽に筆をやりながら、しかも尚江一流の熱っぽい気分でつらゆかれている。こうした、どれもかけがいのない体験のなかにあつて、中村太八郎らとの普選運動にからまる獄窓生活こそ、かれの生涯におけるもっとも深刻なひとつであつたことは周知である。『懺悔』においても、あらかたは語られているが、『鉄窓の歌』にあらたに書きそえたまえがきにも「三十歳の春を僕は監獄で迎えた。この一年半の鉄窓生活は、僕の生涯にとつて、実に再生の天籠であつた」と書いている。かれの生活なり生命なりにかつたこの危機感の重味への再確認が、四十年近くまえの旧作を、あらためて公表させたのであろう。そして、その時現在の心状において、この旧作に対して、「今見ると、この囁語の奥に、青年転換の危機が鮮やかに刻まれて、森厳な氣に打たれる」とさえている。この一群の歌は、尚江にとっては、きわめて大事なものであつたわけだ。いま残っているこの関係の三種の歌稿には、あとでいう「歌稿の二」ははじめ二枚ばかりが散佚

してしているので別として、他の二種には総題がしるされていない。おそらく、『神・人間・自由』に収録公表するにあたって、はじめてすえられたものであろう。

歌稿の一 柱に「憲政本党本部」とある大形半紙二十四行青刷野紙七枚に墨書きしてある。初稿か、あるいはそれに近いと考えるものである。それに、ややあつてのものと思われる朱筆で、詞書や題、および新作一首が欄外に書き加えられている。この一首を勘定に入れ、抹消のも計算すると、すべて一二五首となる。公表したのは、まえにも示したように、七十三首となっている。

尚江が無罪の判決で、東京鍛冶橋の監獄を未決の囚衣を脱いで出たのは、一八九八年（明治三一）十二月七日で、八日早晩、郷党の先輩で、尚江の最初の職場だった「信陽日報」のかつての社長である降旗元太郎のところへ身を寄せた。降旗は、当時、憲政本党の幹事をしていた。尚江が、その党本部の野紙を用いているのはその関係からである。歌稿にこの野紙を用いていることは、歌稿成立の年代をある程度暗示していると思う。『鉄窓の歌』とおなじく、一八九七年（明治三〇）八月十日に裁判所から松本監獄署へ送られる途中での感懐にはじまって、一年五ヵ月近くのもの無罪となつて降旗邸へはいるまでの、だいたい時間を素直に追つた構成になっているが、こんなかたちにまとめられたのは、降旗邸に休息していた二十日間におけることだったのではないか。その休息のあいだに、かねがね歌に托していた囚われの境界を、あらためてたどりながら、一応のかたちにまとめて一種のしめくりをする心持が動いたとしても、あり得る自然ではないかと思

う。この歌稿のほかに、憲政本党本部の野紙をつかっている遺文は今のところ何も見当たらないから、この用紙をあとまで持ち越して置いてたまたま使ったとするよりも、その期間、その場のものとした方が無理がないように思う。とにかく、一年五ヵ月近くの歌が一・二四（五）首ある。が、もとより、降旗邸で一気によんだものではなからう。おりにふれての詠歌にちがいない。『鉄窓の歌』に「梅の花咲く頃」とある一首「私はでぞ、ながめしなまし、白雪の、降るもおかしき、梅のあけぼの」は、「歌稿の二」での詞書はちがっていて、「雪降りぬれば故郷への音つれのはしに次の一首書き添へけるに看守は斯かる戯をなすへき処ならずといたくも叱りて之を塗抹せり余りの言葉に只あきるゝはかりなりき」とある（この事件は『懺悔』でも書いている）。獄窓での記録やメモには、いろいろと工夫が入ったことであろうが、何かのかたちで作品のノートがあったのかもしれないし、また、かりに全然そういう方法がなかったとしても、百数十首ぐらいは、こういう生活のなかで、かえって十分記憶するに堪えるにちがいない。とにかく、こんな状況で、「歌稿の一」が書きつけられたものと推測する（なお、前にいった朱筆をいつ加わえたかは、まったくわからない。ことによると、降旗邸休息後のものかもしれない）。

歌稿の二「歌稿の一」を整理して清書した、柱に今の商標がある半紙二十四行青刷野に墨書きの八枚ひとつづりである。ただし、八枚目はそえ紙で、七枚目は裏余白。それに、まえにちよつとふれたように、はじめ二枚分と思われる散佚がある。つまり、『鉄窓の歌』でいえば、「碓氷峠を越ゆるに、春風暖く、そとる眠

を催す」の詞書までが失われていて、「人知れぬ云々」の歌から残っている。この歌は、「歌稿の一」では二十一首目にあたる。浄書散佚の部分を、かりに二十首として勘定すると、全体としては百十九首に上ぼつてあることになる。詞書を補足し、順序を改め、一で消したのを再び生かしたのも見受けられる。ところで、この整理浄書がいつおこなわれたかは、必ずしもはっきりしない。今の用紙は、一九〇〇年（明治三三）の内容をもつ別の歌稿にもつかわれているが、そのへんまではくだらないような気がする。筆蹟のうえからも、判断はむづかしい。が、いずれにせよ、この一連の歌に、なみなみならぬ愛着をもっていることがわかる。

歌稿の三 これは、ぐっと飛んで、『鉄窓の歌』発表の極く近くのものだと思われる。つまり一九三〇年代、「歌稿の二」から少くとも三十年ぐらいを隔てているものだ。TSとしるしのある、代赭色刷り二百字片原稿用紙三〇枚に一枚はぼ三首あてのペン書きである。歌稿の二と三のあいだに、さらに整理したものがあったとは言い切れないが、三を、一・二と比較すると、一を土台にして二を参酌したように思われるふしがある。が、とにかく、三において一段と推蔵が加えられている。『鉄窓の歌』に出ている、長い詞書をもったユーモラスな鼠の歌、官給の鼠紙にこよりで歌をはりつけたものが獄吏によって棄てられた歌、格子の間から播いてやる飯粒に寄ってくる雀の歌、これらの、それぞれおもしろい三首の歌も詞書も、一には全然見えていない。二のはじめの方が失われているのだから断定は控えなければならぬ。

が、この三首は、三にだけ見えるものであり、しかも、原稿用紙の欄外への追加書き入れて、題も歌の終にカッコのなかへ入れて、「鼠」「歌没収」「雀」と簡単に示してある。旧歌稿をあらためて整理推敲しているうちに、獄窓生活が何くれとなく浮かびあがって来たにちがいない、この三首の内容もかたちにしておくべきものとしてよみがえって来たのではないか。これだけおもしろい題材を、「歌稿の一」でとりあげていないのはや不思議だが、獄窓生活の一種の機微なので、さしあたっては形象にしていなかったのかも知れない。ふとそれを思い出すと、かえって印象きわやかに再生し、決定稿にあたっただけ長い詞書をそえない心持になったのではないか。とにかく、三十年後の地点に立つて、あくところなく補足し、修訂を加えているのは、その体験の、生涯における重味にもよるわけだが、同時に、詠歌への熱意の容易ならぬものだったことを意味しよう。ふたつみつ修訂のあとをたどっておこう。() の内は消したものと語句、傍・・は() の内を改めた語句。*印は筆者の注。

▲「歌稿の一」——

明治卅年八月十日始めて送られて松本監獄署に戻れる時裁判所を立ち出で、陽国神社のあたりを歩きしに折しも夕立の雨はれて雲間に月のさやかなりければ
雨はれて月は(木の間)葉末に見へ(ながら)ぬるをひとり濡れゆく森の下露

*右を抹消してあらたに次の歌を欄外へ墨書きしている。

月影は葉こしに見へつ夕立の雫に濡るゝ森の下道
●「歌稿の三」——

○……陽国神社の木の下(道)かげをたとれるに(*この前後もそのまま)

雨はれて月は梢に見えながら夕残に濡るゝ森の下(露)道¹ 道¹ 出つれと濡れまさる名残の露の森の下道² 道² 雨はれて月は梢に見えながら森の雫の闇の下道³ 道³

闇の雫よ森の下道⁴ 道⁴ 名残の雫森の下道⁵ 道⁵

▲「歌稿の一」——

一月廿四日松本の裁判所にて有罪の判決を受けたる折しも雪いたく降りければ

久方の(空さへわかず降る雪に)天きる雪にあやなくも払ふ蔭なき我が袂かな

●「歌稿の三」——

○一月二十四日松本裁判所(*松本「の」なし。以下修訂なし)。

久方の天きる雪(にあや)のつれなくも(払ふ蔭なき)つもるにまかす我が袂かな

*上三句を、さらに「降る雪の払ふひまさへなき身には」と改め、そのうえ、右すべてを抹消して左の歌を書き入れている。

久方の天なき雪の面白くつもるにまかす袖の上かな

▲「歌稿の一」——

十月五日東京控訴院の仮監房にて

思ひやる故郷人の今日しもやあづまの空をながめ暮らさん

* 右を抹消して左の歌を書き入れ。

吾妻なる空をながめてたらちねは(□□の我身を)にくき子と
しても思はさてやあらん

●「歌稿の三」——

○十月五日東京控訴院の檻房にて

あつまなる空をながめてたらちねはにくき子としても思はさて
やあらん

* 右を抹消して左の歌を書き入れ。

言葉にも顔にも出さてたらちねは東の空や眺めたまはん

▲「歌稿の一」——

十二月八日曉天降旗氏邸にて

有明のなれぬ火影に夢さめて(いつもなからの月)やどもる月
の影かとそ(思ふ)まどふ

●「歌稿の三」——

○十二月八日の曉降旗氏邸に目さめて

有明の(さ)なれぬ燈影に(夢さめて)驚きてひとやの窓の月
かと思ふ

* 下二句に、「暫しは迷ふ夢かうつつか」を併記してある。

「歌稿の三」が、『鉄窓の歌』で、決定稿としてさらに修正が
あり、句ごとに句点をほどこしてもある。対照は省略する。以上

が、尚江が生前発表した代表作『鉄窓の歌』の定着までの文獻的
すじみちのあらましである。内容としては、たとえば、『懺悔』
にも語られている聖書閱讀にからまる尚江の思想史上・精神史上
の重要な問題の脱落があったりするなどの注意すべき諸点がある
けれども、今はふれない。

b

(1) 出獄帰郷前後、(2) 木曾旅行、(3) 鉱毒視察、と仮り
に名づけたものは、「歌稿の二」とはほぼ同じ紙質の、柱に命じる
しのある半紙二十四行青刷野紙に墨書きの五枚ひとつづりとなっ
ているが、(1) が二枚半で、ややまとまっております、(2) と(3)
は、それぞれ半枚ずつの、実は断片といっている程度のものである。
なかで、(1) が『鉄窓の歌』にすぐ接しているもので、この期
間の尚江の伝記上事実を確実に語ってくれもするので、また別個
の興味がある。つまり、出獄して降旗邸で休息していた尚江は、
そのかんに、石川半山の肝煎で島田三郎の毎日新聞社入りがきま
り、暮れには妹伊和子を伴って帰郷したが、翌年二月あらためて
上京した。その前後の足どりや状況が、日づけまであきらかにと
らえられる。その全部を翻刻しておこう。

(1) 出獄・帰郷前後

明治卅一年の十二月廿九日青山に(姉)(*エンビツ)妹を訪ひ打ち連れ
て帰郷の途にそ上りぬ

故郷の空を恋しみ新玉の年よりさきに立ち返へるかな

秩父あたりの山の雪を見て

冬枯の野末の雪をなかめしは秩父の山の雪にそありける

汽車碓氷の嶺に差掛りけるに時雨ふりけれハ

吾妻路のつきぬ名残か山時雨空は晴れつゝ袖を濡りける

雨のやかて雪とふり替りければ

いつしかに尾上や近き山時雨降りかはりたる空の雪かな

此夜上田に泊りけるに宿の主妹を是我妻と誤りければ

わきもこと初ひの旅寐の宿ならは明くるを怨む今夜なるらん

卅日朝早く途に上りけるに雪深ければ

白妙の雪のねり衣打ちかさね誰を待つらんおちこちの山

卅一日の夜母諸共衆しく歳を送るにつけて

わひしく迎へし今年の思ひ出られて

憂きかなかに迎へし年の暮れはてゝ衆しく送る今日にもあるかな

三十二年の元旦

足引の山の端出る朝日影波の上にや君は見るらん

偶感

思ひ寐の夢路の峯も隔てねは人知れすこそ夜はまたるれ

亡友を懷ふて

あめにます君し思へは久方の空行く月も恋しかりけり

一月十一日安曇よりの帰途二首

冬の日の急くとすれとと暮れて枯野遙に火影見ゆなり

行く水の絶へぬ思に人知れず落とす涙を誰かくむらん

春の来る方とし聞けはひんかしの雪の高根も慕はしき哉

山里は雪に埋れて立ち出てん道の葉も絶へにけるかな

十六日伊和子上京の途に就く明けの朝寒さいや増りければ

この冴ゆる朝けの風に思ふかな浅間風のいかに吹くらん

友の上京したるを懷ふて

君はしもなれぬ都の月を見て恋ひやますらん故郷の空

二月十日上京の途上

都なる人に見せんと思ふには消ゆるを怨む袖の雪かな

山の戸に誰かくれ居て鶯の浮世の外の声は聞くらん

此日陰曆の元旦なりと聞きければ

山里は雪深ければ年さへに後れて今日や立返りけん

荷馬の行き違ひさま放屁しければ戯に

別れゆく人を恋ひしみ忍ふにもあまる心の音にや出てけん

山路の雪ふみ行くに音のしければ

心なきものとな言ひそ白雪も我が行くまゝに声立てゝ泣く

此の夜上田の旅宿にて

千曲川冴ゆる瀬音に思ひ寐の夢も結はぬうき枕かな

十一月朝軽井沢にて

一とむらの雲を見てしは浅間山晴れし尾上の烟なりけり

信濃路の雪の尾上を空におきて霞みにけりな毛の国の山

廿一日品川沖をながめつゝ

帆影のみ霞の奥に見えながら行くともわかぬ沖の釣舟

青山なる妹の行きて泊り得るやと言ひ来しければ

ことはりやるとて

何処にか君を宿さん我さへにあはれかりねの夜のさむし

以上である。歌風が古風で、どちらかというと佳品に乏しい。

この歌稿には消しが少しもなく、他のものとひと綴りにしてあるところからみると、けつして初稿ではない。このまえに、メモかノートかがあったものと想像される。それを、一九〇〇年（明治三三）以降に整理したものと思われる。

(2) 木曾・旅行

卅二年の秋木曾の旅路に

河霧の麓はこめり木曾山の峯のみち葉夕日照り添ふ

出て入りの山の端近かし木曾の里あかすのみやは月を見るらん

御料林のみにて薪炭の価なか／＼に貴きを聞きて

すめろきのみ林なれば樵りも得て烟まれなり木曾の山里

東海道に出て富士の雪を見てよめる

諏訪の湖に見て来し富士の芝山は木曾路なる間に雪をつもれる
夢むすふ蝴蝶なからそ手折らまし君が宿りの野辺の白菊

* 後神俊文編『木下尚江演説年表稿』によると、尚江は、

一八九九年の十月五日には松本の神道公会所における婦人慈善会の発会式で挨拶しており、また六日には、おなじく一ツ橋川崎屋における記者懇親会に出席、挨拶をしたと推定されている。この歌稿は、おそろくこの旅行につながる行程で得たものではないかと思われる。「諏訪の湖に」と「夢むすふ」との間に、一首書きかけの消しがあり「あはれ□」と読める。このあたり、諏訪にからまる臆測がうまれなくもない。この歌稿の整理も（1）

とおなじ時期であろう。

(3) 鈺毒視察

三十三年の春足尾の途次渡良瀬の岸に泊りけるに
鈺毒の為め鶯の来鳴かす（と風か）語るを聞きて

鶯も来なかつなりし里人は何をしるへに春は知るらん
袖たにも払はてむかししのふかな佐野のわたりの雪の夕暮
覚束な明日入る路や絶えぬらん足尾の山はみ雪ふるなり
毛物たに行けるあとなし足尾山何を乗に雪ふみわけん
備前館軒端の峯も見へわかつ雪ふりしける赤倉の里
山かつは軒端のつら／＼打とけて春咲く春をいつと待つらん
春さむみ明日も降るらし山の端の雪けにくもる落方の雪

* 尚江は、一九〇〇年二月十六日から二十二日まで、毎日

新聞の特派員として、鈺毒地方・鈺毒問題の实地調査に出かけた。その報告記事が、二月二十六日から三月十七日へかけて、「毎日新聞」へ連載された。尚江の小説『労働』や『田中正造翁』に全文引かれている吾妻村大字下羽田の農民庭田源八の筆になる、尚江のいう「渡良瀬川の詩」と、第一首は対応することはいまでもない。この調査旅行関係の歌稿整理も（1）（2）とおなじ時期であろう。「鈺毒視察」とはいったが、鈺毒に直接関係する歌は一首しかない。もとのメモにはもう少しあったのかも知れず、あるいはまた、かれの激情の表出は、報告記事である程度遂げられたのかもしれない。が、いず

れにせよ、この一首だけではさみしい。尚江といえども、「渡良瀬川の詩」の類を絶した感動のまえには、どうにもならなかったのかもしれない。だから、自分の雪中行だけに焦点が合わされてゆく結果になったのかもしれない。

c
伊香保時代を歌ったもので管見に入ったものに、萩原進氏の『上州路―その旅人たち』（一九五八年・高城書店出版部刊）に一九一九年（大正八）の『伊香保みやげ』から引くところの『山居一年』と題する八首があるが、自筆の残存で見ているのは、今のところ二種ある。

（1）『山居』の題で、青鉛筆をもって八首（外に、他の主題のもの一首）をしるしたノートの残闕一枚二ページ分。年代はわからないが、明治期のものでないことはたしかで、大正期、ことによると昭和へくだるかもしれない。

（2）『伊香保山居』（筆者仮題）は、aの「歌稿の三」には近い晩年の筆蹟で、「H形10×20イーグル印原稿紙」としるしたセビヤ刷二百字の片面原稿用紙五枚にペン書き四十三首（外に、他の主題のもの三首）のもの。

これらのほかに、もともと当時の歌稿があったことも考えられなくはない。その場合、（1）はその一部を再録したものなのか、それとも別の系統のものなのか、まったくわからない。（1）の元本のノートに、山居関係のものが、どの程度に収録されていた

か、もう少しあってもいいわけだが、書き方からすれば、あとで示すように『山居』の題で八首を書きつらね、つづく九首目は赤鉛筆で他の主題の歌を書いているというぐあいである。（2）には（1）と重複する歌が一首ある。（2）整理に際して、（1）あるいはその元本を参照したのなら、（1）からでさえもっと採録していいものがあつたらう。『山居一年』と（2）には、重複する作品はないけれども、モチーフと表現が似通っているものが三首ある。かれこれややこしいことになるが、とにかく、もとの歌稿があつたことだけは、みやすい事実であらう。（2）は、そういうものに拠って整理されたのではないか。ところで、この整理（というより、その準備）は、『鉄窓の歌』の整理よりは、あるいは後だったかもしれない。最晩年の筆蹟にひじょうに近いからである。それに、『鉄窓の歌』にひきつづき、生涯に一線を引くほどの一大転機だった伊香保時代へ及ぶのは、自然な方向だと思われる。ちなみに、尚江は、母の死を契機に社会運動から離れて、一九〇六年（明治三九）の十月末から伊香保の木暮金太夫旅館の離れでくらし、翌年の暮れに下山帰郷して、例の三河島生活がはじまる。とにかく、（1）（2）の全作品を写しておこう。これらの歌は、小説『墓場』と対応することはいうまでもない。（△▽）は消しのなかの消し。「」は補入。

（1）山居（原題）

○革命の民の叫に目さむれば枕の下の谷川の音（*2と重複。

この作抹消）

○野も山も落葉したれやをちこちの麓の里のともし灯の影

○岩清水落葉もろともくみ上げて霜の谷道有明の月

○ふけわたる月夜の空の(浅茅)すゝき原(露)玉の白(玉)

露虫の声

○物思ふ枕の下に声さえて湯沢の河鹿夜もすから鳴く

○もみち山夕日まはゆく語り(たるむかしの人も)合ひし君が

黒髪老ひやしぬらん

○山茶花の垣根へたてゝ朝な／＼庵主のわかき心経の声

○夕立のはれゆく山の青空に高くうかへり虹の掛橋

○武蔵野の枯野の空の不二の山朝日夕日の峯の白雪(*この

歌、赤鉛筆)

(2) 伊香保山居

○峯ノ雲谷川ノ音カ(ヨ) (今日ヨリシ我カ明ケ暮ノ) 明ケ暮

ノ我カ今日ヨリノ友トタノマン

○逃レ来シ浮世ノ空ノ恋シクテ(峯) 山ニ上リテ声限り呼ブ

○革命ノ民ノ叫ビニ目サムレバ枕ノ下ノ谷川ノ音

○雪晴レテ月夜ノ山ノ青空ニ響クヤ雉子ノ谷渡ル声

○虫ノ声露ノ白玉、坂東ノ大野ノ末ニ月へ上ボレリ

○伊香保沼アヤメ咲ク野ニ旅寐シテ飽カス聞カマシ山時鳥

○鳴キワタル山時鳥、月カゲニ姿モ声モ遠ザカリツ、

○秋草ノ花ニ埋モレテ大空(ノ)ヤ往来ノ雲ヲナガメ暮ラシツ

○(白) 山百合ノ花ノ匂ニ我酔ヒテ(夢ノ如クニ山路ハト) ヴタ

ドリツ) 暮ル、モ知ラデイネニケル哉

○雪残ル山カゲノ宿ヲ出テ見レバ麓ハ花ノサカリナリケリ

○青麦ヤ藁家ノ軒ニ桃咲ヒテ木樵リノ音ノ峯ニ聞(エツ) ユル

○思フ事アラヌ宿トヤ谷川ヲ隔テ、余所ニ人ノ見ルラン

○朝タノ霧ノ匂ヲナツカシミ晴レ行ク空ヲ恨ミヌルカナ

○谷ノ路寛ノ音モ埋レテ落葉ノ庵トナリニケルカナ

○香ニ匂フ落葉ノ下ニ目ヲ閉ジテ我レ長ヘニ醒メジトゾ思フ

○野モ山モ皆落葉シテタサレバヲチコチ里ノ燈火見ユル(*こ

の歌、抹消)

○夕日影山風寒キ細路ヲ茅刈リ馬ノ今日モ帰り行ク

○雨ト降ル落葉ノ音ヤ限モナキ月ノ光ヤ涙湯ノ如シ

○草(ノ) 枕石ノ枕ヤ天地ノ朽チナン後ノ世コソ恋シキ

○我モ無ク神モナキ世ニ帰ラント(朝夕) 明ケ暮レ祈ル人モア

リケリ

○夕立ノ雲ノ行方(カ)モ鳴神(ノ)モ山下遠クナガメヤリツ、

○雪フミワケ山ニ上リテ晩ノ(東ノ) 雲居ノ、ハ1 ヴ日出ツル

ハ2 ヴ空ヲナガメヌルカナ(*この歌、抹消)

○螢飛ブ山ノ湖水ニ舟浮ケテ「ウツ、ノ」夢(ノウツ、) ニフ

ケリヌルカナ

○火ヲ吹ケル事モアリシカナ、山上ノ星影宿ス碧ノ湖水

○一ト年ノ(仮リノ宿リヲ) 山ノ庵ヲ立出テ、果ナキ空ノ旅ニ

迷ハン

○枯草ノ香リニ身ヲバヒタシツ、何処ヲ(タドル我) 迷フ心

(ソモ) ナルラン

○山々ニ何時シカ青クカスミツ、知ラヌ小鳥ノ谷ニ鳴クナリ

○様々ノ花ハ句ヒツ様々ノ(小)鳥ハ(啼キ)歌ヒツ春ノ山越
○白妙ノ雪ニ埋モル、暁ヲ麓遙カニ鶏ノ声

○落葉スル今日此頃ハ燈火ノオチコチ里ニ見エマサリツ、

○夕立ノ過キ行ク山ニ日ハ照リテ空ニハ浮ブ虹ノ懸ケ橋

○山中ノ小田ノ早乙女事問ハシ、道ニ迷ヘル我ハ旅人

○仮リノ名ノ仮リノ宿リト知リツ、モ又タ帰リ行ク夜半ノ山道

(＊この歌、抹消)

○タヤミノ虫ノ声ヲフミ分ケテ山路ノ露ニ濡レニケルカナ

○日ノ出ツル空ヤ何レト白雪ノ山ニ上リテナガメヌルカナ

○霜白キ落葉ノ山ノ暁ニ断エ、残ル虫ノ声カナ

○山人カ焚クヤ落葉ノ夕煙、木末ニカ、ル三日月ノ影

○我ト我カ惑フ心ヲ罵リツ、(怒リ)憎ミツ、果テハ憐レトゾ

思フ

○利根川ヤコナタノ岸ニ舟呼ベド、川波高ク覺束ナシモ

○晴レワタル星ノ青空、夜ハフケテ枕ニカヨウ山川ノ音

○何処ヲバ我カ故郷ト語ラマシ、旅ヨリ旅ニ出ツル身ナレバ

紹介

中村俊定校注

『芭蕉句集』「連句篇」

岩波書店刊行の「日本古典文学大系」中に収録のもので、大谷篤蔵氏校注の「発句篇」と合して一冊となっている。本篇は、芭蕉連句の代表的な作品として、『俳諧七

○我妹子(ガ)ノ待チワブル山ヤ天ガ下我カ故郷ノ空トナガメ

○夜ルノ間ニ山霧ハレテ草枕、マ近ク立ツヤ浅間ノ煙

○浪枕東ノ海ニ照ル月ヲ、山(ノ上)ニモ人ノ見テヤアルラン*

○紫ノ雲ゾ棚引ク山城ヤ古キ都ノ夕暮ノ空

○磯ノ上古ルノ宮杜秋フケテ夕風寒ク我衣ウスジ

*以下三首は「伊香保山居」のものではない。一九一一年(明治四四)の信州・北陸から京都へかけての旅の歌かと思われるが、原のままにしておく。

〔附記〕このあとへ、今井邦子へ歌稿をみせていたころの亡妻哀傷歌を中心とする「d」を翻刻紹介する計画だったが、紙幅の都合で割愛する。そのため、叙述が前後照応を欠くことになったけれども、ひとまず、このままにしておきたい。(一九六二年夏)

部集』『俳諧深川』『鶴の歩み』の中から芭蕉の一座した歌仙十八巻と百韻一卷を選び評註を加えたもので、巻を選ぶにあたっては、とくにその作風の変遷をうかがいうるように配慮されている。頭注は、連句のもつ深い味わいを簡潔平明に注する一方、随所に参考として古注を引き、連句作法による付筋の考察を徹底せしめている。厳正な本文批判の上に立った適確な語釈と、連句

の真意と味わいを心ゆくまで解明した鋭く深い評註には、この校注者ならではの鋭敏な文学的感覚と賢実重厚な学風がにじみ出ている。巻頭の解説は蕉風連句の手法にも説き及んでいて、この方面の絶好の手引であり、巻末付載の作者略伝と俳書一覧もまた利用価値のすこぶる高いものである。(岩波書店「日本古典文学大系」第四五巻・定価八〇〇円・昭和三七七年六月刊)